

心豊かな学びの循環

地域の
特色ある
活動

1 標津町の紹介

標津町は北海道の最東端、根室振興局管内の中部に位置しており、左手には日本最後の秘境といわれる「知床半島」が、右手には日本最大の砂嘴「野付半島」が延びています。正面はオホーツク海に面し、洋上わずか24km先には北方領土「国後島」がその雄大な姿を見せており、背後には、広大な牧場が広がる根釧原野を擁しています。「シベツ」の語源がアイヌ語で「サケの居る所」を指すように、古くからサケ漁を中心として拓けて参りましたが、現在に至るまでには記録的不漁など、様々な逆風に対して泰然と立ち向かってきた歴史があります（人口約4,900人）。

2 町内の園・学校

町内には、標津地区、川北地区にそれぞれ認定こども園、小学校、中学校が1校ずつあり、道立の高等学校を併せると合計2園・5校と連携がとりやすい環境にあります。

また、標津・川北両地区に「学校運営協議会」を設置しており、地域の声を生かしながら「学校を核とした地域づくり」が推進されています。

3 「ちいきあそび」の取組

令和4年度に川北地区の地域コーディネーターが中心となって「川北ちいきあそび」がスタートしました。「地域の自然や人と関わる“あそびと原体験”を通して、子供たちに不可欠な“成長の土台づくり”に貢献する」というテーマ。4年生以上の小学生を対象に、週1回放課後約1時間の活動です。春に

北海道標津町教育委員会

は森に入って芽吹きを感じとり、夏になると川遊びや魚すくい、ハンモックやツリーハウスを堪能して、秋には枝に刺したマシュマロをたき火であぶり、冬には雪中ラグビーを楽しむ……。

昔は当たり前だったこういった体験を積み重ねていくことにより、子供たちの心が突き動かされて好奇心が芽生え、意欲や主体性が引き出されつつあるという報告も受けています。できることなら他の地域にも広がっていき、ここで育った子供たちが、大人になって今度は「ちいきあそび」をサポートするような日がくれば、と期待しています。

4 ふるさと学習と防災学習の循環

教育委員会では、平成14年から小中学生を対象に「食べるまでツアー」を実施しています。基幹産業である水産業や酪農業を理解し、「わが地域に対する誇り」に繋げることに加え、生産から消費者の口に入るまでの過



程を理解することで「命の大切さ」や「感謝の気持ち」を醸成することを目的としています。水産業の学習では、小学生が、漁業者の講話、ホタテの殻むき体験、漁業協同組合の調査船への乗船等を体験し、中学生になると、地域ガイドによる講話とサケ・マスの缶詰づくり等の体験活動を行っています。

酪農業については、小学生が、農業青年クラブの講話、酪農体験、牛乳を使った調理実習を行い、中学生でも、酪農家の講話や牛乳の消費拡大に繋げるための調理実習。最後にこれまでの学習についての成果と課題をまとめて発信する取組を行っています。



このように「食べるまでツアー」を中心として、自然、林業、商業、観光業、歴史・文化等について、小学校段階では「標津のよさ」に気付けるような体験的な学習を重ねながら課題意識を芽生えさせ、中学校では、それぞれの興味のある分野について学びを深め最終的に標津町を訪れる修学旅行生を相手に、あるいは自分たちの修学旅行先で、ふるさと標津をPRするような活動に繋げ、さらに高校では標津の食材を生かした商品開発を行うなど、これまでの学びを具現化していける学びの循環を創り出せるよう学校間の連携を進めているところです。

また、標津町では、防災学習にも力を入れています。標津高校の生徒会が東北被災地を視察し、感じたこと、学んだことをまとめて各小・中学校に出向いて発表しています。これに加え、高校生が作成したオリジナルの防災カルタや避難所運営ゲームなどを用いた出前授業で防災意識の高揚に貢献してくれています。

このように「ふるさと学習」や「防災学習」で学びを深めた中高生が、小学生や園児に対して説明をしたり、関わり合ったりする中で、上級生は、相手を想定しながら、分かりやすい伝え方を工夫し、下級生は、学んだ内容を理解するだけでなく、上級生の姿に



夢や憧れを抱き、自分の行く先を見通しながら学習や生活を進めていくという大きな効果が期待できます。

このように本町では、地域の青年や高校生に関わってもらった園児や児童がやがて中学生や高校生となり、主体的に下級生に関わっていけるような「地域循環型の生涯学習社会」の構築を目指しています。

5 学校と行政が連携した挑戦

昨年度は、町内の小中高へ赴き、各校の児童会・生徒会役員との懇談を行いました。児童生徒が日頃、課題に感じていることについて聴き取り、施設の整備等に限らず、学習や生活の向上につながる視点をもって教育委員会内でひとつひとつ吟味し、できる限り見える形での課題解決を図りました。中でもこれまで生徒会代表で視察していた高校生の東北被災地への訪問について、「防災意識を高めるために、高校生全員が視察することができないか」というニーズに応え、今年度より1年生全員による東北被災地への視察研修が実現する運びとなりました。

また、これまで中学生の修学旅行先を道内としていましたが、校長会からの要望を検討し、今年度からは本州に足を延ばします。昨年度まで有志で行ってきた長野県生坂中学校との交流を更に深化させるとともに、成長期において首都東京を体験するなどグローバル社会を生き抜く人材を育成することを目的としての挑戦です。

今後も全国の皆様と連携させていただきながら、未来を担う子供たちがたくさんの選択肢を獲得するため、様々な視点から力を尽くして参ります。



教育長
山崎 佳